米欧回覧

第２４号
編集・発行
米欧回覧の会
事務局

岩倉使節団派遣百三十年記念国際シンポジウム

「岩倉使節団の再発見とその今日的意義」

プログラムの全容ほぼ固まる！

かねて企画が進められてきた当会設立満五周年行事の国際シンポジウムは関連行事も含めてほぼ概要が決まり、いよいよ各部門の具体的な準備段階に入りましたので、そのあらましを紹介します。

国際シンポジウムは二部に分かれます。

一、セミナーの部（第一日と第二日・・招待者並びに会員及びその紹介者）

二、パネル・ディスカッションの部（第三日・・一般公開）

セミナーの部では国内外の学者、研究者約二十名が一堂に会して専門的な発表を行い質疑応答や意見の交換をします。ここにはフロアメンバーとして会員並びにその紹介者が参加できます。

パネル・ディスカッションは二日間の研究発表を踏まえて、「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」の今日的意義にしぼり、キー・ノートスピーチの後、パネラーからの意見の発表があり、さらには会場からも参加できる形で進められます。このセッションは公開とし、一般の研究者はもちろんビジネスマン、主婦、学生なども大いに歓迎したいと思います。

また、関連行事としては各担当幹事が中心になり次の企画が進行しています。

一、岩倉使節団派遣百三十年記念祝賀並びに招待者歓迎レセプション（招待者及び会員、並びにその同伴者及び紹介者）

二、映像「岩倉使節の米欧回覧」（要約版・・九十分）の特別上映会（招待者のみ）

三、映像「岩倉使節の世界一周旅行」（オリジナル版・・三百分）の上映会（一般公開）

四、懇親会（招待者とセミナー参加者）

五、交流・展示サロン（三日間常設・公開）

なお、レセプションには、岩倉使節団が訪問した米欧十二ヶ国から代表をお招きすることになっており、各国の在日大使館から大使、公使などが揃って参加される予定です。

また、岩倉使節団のご子孫の方も大副使のご子孫をはじめ随員や留学生などのご子孫が多く参加されるものと思われます。

日本経済新聞社の後援、トヨタ財団の協賛決まる

国際シンポジウムの開催については、既報の通り国際交流基金と東芝国際交流財団の協賛が決まっていますが、その後新たに日本経済新聞社の後援とトヨタ財団の協賛を得られることになりました。まことにご同慶のいたりであり、両社に深く感謝の意を表したいと思います。

なお、特別協賛金については、現在の振込みが、会員八十八名・百三十三万円、会員外十二名・十九万円、計、百五十二万円となっています。お陰様で目標額に後一歩のところまできており、会員外も含めご芳志のある方はどうぞよろしくご協賛の程お願い致します。

大歓迎された岩倉使節団

泉　三郎

岩倉使節団は何故、米欧各国でそんなに歓迎されたか、という疑問があります。

とりわけアメリカの歓迎ぶりは目立っておりますが、英国でも欧州でもなかなかのもてなしぶりでした。久米邦武は「米欧回覧実記」の前書きで、米英各地では招待状が束をなし、パリを発つときにはベルギーから使いが来て「製作所及ヒ名所、一百余ケ所ヲ記シ、周覧ヲ望ム、他ノ諸国モ大抵此例ナリ」と書いています。

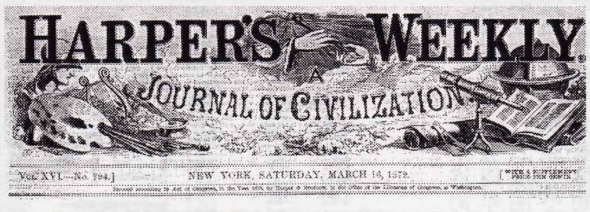
その理由は何か・・

一つはやはり好奇心でありましょう。古くから黄金の国という風聞もあり、二千年の歴史を持つエキゾチックな国、しかも二百五十年近く鎖国していた国ですからいよいよ興味はつのります。そんな国からの使節です、当然、珍しく交流・親睦をはかりたかったと思います。

二つはビジネス上のことです。商売になる相手であり、とくに工業製品の売り込み対象として関心が強かったと思われます。

三つには日本という国、日本人への高い評価でしょう。アジアの中で、日本だけが果敢に西洋に交際を求めてきた、とにかくこれだけの大使節団を派遣した国はありません。それから既に幕末開国以来の交流で、“日本はなかなかの国である”ことがわかってきており、幕末以来の日本からの留学生が欧米各地で立派な成績を挙げています。“日本人はちょっと違うぞ”という気持ちがあったに違いありません。

それから、使節団の面々自身も、当時の肖像写真をみても解るとおり、なかなかきりりとしていい顔をしており、気骨、品性、教養といった面からも、東洋の伝統ある君子国から来たサムライらしい独特の雰囲気を漂わせていたからではないかと思うのです。



〔特集〕グラフィック

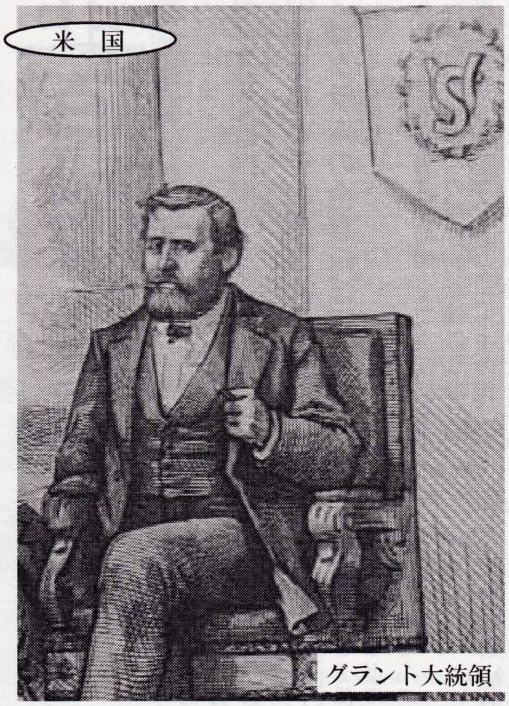
岩倉使節団を迎えた各国首脳たち

サンフランシスコで撮影した写真を銅版画にしたもので、アメリカの絵入り新聞「ハーパーズ・ウィークリー」に掲載されたものです。岩倉使節団の首脳陣と案内役の駐日公使デ・ロング、通訳のライス（中央）、総領事を委嘱していたブルックス（後方立ち姿）です。

本号は、岩倉使節団派遣百三十年を記念して、特集グラフィック「岩倉使節団と各国首脳たち」をお送りします。

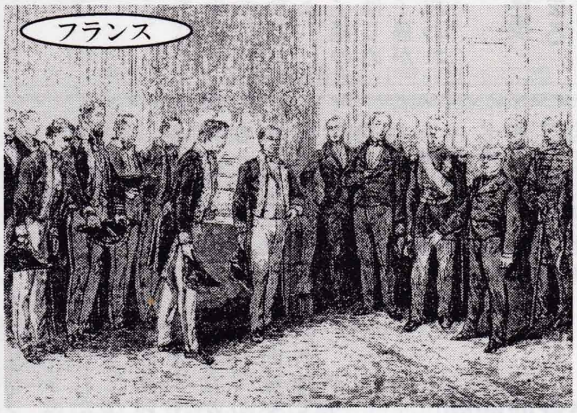
これらの写真や銅版画は絵入り新聞「ハーパーズ・ウィークリー」（米国発行）、「グラフィック」（英国発行）や「ルニヴェール」（フランス発行）などに掲載されたもので、使節団を迎えた各国の元首、皇帝、国王、大統領、宰相、外相などの肖像です。この絵図から当時の各国の華やかな歓迎ぶりを想像していただきたいと思います。

米国



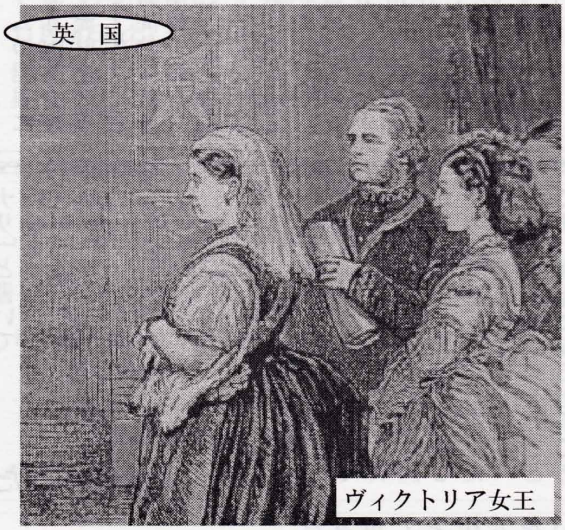
グラント大統領

フランス



ティエール大統領

英国



ヴィクトリア女王

1872.12.26
仏朗西国（フランス）
ティエール大統領謁見

1872.12.5
英吉利国（インギリス）
ヴィクトリア女王謁見

1872.3.4
米利堅合衆国（メリケン）
グラント大統領会見

1873.3.1
普魯士国（プロイス）
ウィルヘルムⅠ世謁見

1873.2.25
荷蘭佗国（ホルランド）
ウィリアムⅢ世謁見

1873.2.18
白耳義国（ベルギー）
レオポルドⅡ世謁見

プロシア

ウィルヘルムⅠ世

ビスマルク

オランダ

ウィリアムⅢ世

ベルギー

レオポルドⅡ世

デンマーク

クリスチャンⅨ世

THE GRAPHIC

AN ILLUSTRATED WEEKLY NEWSPAPER

VOL. VI.—No. 145 SATURDAY, SEPTEMBER 12, 1872

ヨーロッパの三皇帝と宰相、外相が揃った珍しい絵図。前列左からウィルヘルムⅠ（独）、ヨーゼフⅠ（墺）、アレクサンドルⅡ（露）。後列左からビスマルク（独）、アンドラッシイ（墺）、コルチャコフ（露）。二年前だったらナポレオンⅢが入っているところだった。

ロシア

アレクサンドルⅡ世

イタリア

エマヌエレⅡ世

スウェーデン

オスカルⅡ世

スイス

セレソール大統領

オーストリア

ヨーゼフⅠ世

1873.4.25
瑞典国（スウエウデン）
オスカルⅡ世謁見

1873.4.19
嗹馬国（デンマルク）
クリスチャンⅨ世謁見

ロシア連邦

1873.4.3
露西亜国（ロシヤ）
アレクサンドルⅡ世謁見

1873.6.21
瑞士国（スイス）
セレソール大統領会見

オーストリア

1873.6.8
墺地利国（オーステンレイキ）
フランツ・ヨーゼフⅠ世謁見

1873.5.13
以太利国（イタリヤ）
エマヌエレⅡ世謁見

第22回例会

山崎渾子教授講演

「岩倉使節団における宗教問題」

7月23日（月）
国際文化
会館ホール

平日夜にも関わらず盛会

第二十二回例会のハイライトは聖心女子大学教授山崎渾（ミナ）子氏の講演であった。

半澤健市氏（今回例会担当の歴史部会幹事）が講師の経歴と著作を紹介したのち講演「岩倉使節団における宗教問題」に入った。A四・二枚のレジュメとB四・三枚の資料が配付され講演が行われた。

長年の研究成果を平明で明晰な語り口で話されたので、真夏の夜の一時間余もあっという間であった。終了後は質疑応答があったが高札撤去の評価などに活発な質問が寄せられた。討論時間不足と感じた会員は例会終了後に本館喫茶室に集い、山崎先生を囲んで楽しげに続きを語りあっていた。

熱心な多数の参加者

◆講演要旨◆

★研究史と私の関わり

岩倉使節団とキリスト教問題の研究史はカトリック教会側の護教的報告からはじまった。その後は日本の仏教や神道との関係、岩倉使節団とキリスト教との関係の強弱をどうみるか、日本における信教の自由問題、ハリストス正教会信徒捕縛事件、外国人研究者によるもの、など様々な視点からの研究がある。

私自身は聖心女子大から北大大学院へ入り田中彰先生に学んだ。岩倉使節団と宗教との関係は深いと考えている。プリンストン大学でマーティン・コルカット先生にも指導を受けた。最近ではキリスト教禁止の「高札撤去」の評価をめぐって私自身が関わった論議もあった。それはのちに述べるつもりである。

★岩倉使節団と宗教問題

①密約とキリスト教

使節団は、訪問先各国での日本のキリスト教弾圧への非難を予想し在日公使たちと、将来の解禁を理由にして批判の表面化をしないよう密約をした。

とはいえ、論争に備えて「耶蘇書類」は携帯していった。現地での会談で使節側は、禁制は緩和しつつある、過酷な処刑はしていない、心の内面は拘束しない、宣教師の処罰は彼らの違法行為について行っている、などの主張をしている。

②宣教師ゴーブル

久米邦武は使節団では田中不二麿とともに宗教取り調べ係も担当した。久米の宗教観は生涯の前後半で異なるが使節団時代は、海外で宗派を聞かれたら仏教ともいえず、儒教ともいえず結局神道といおうと決めた、しかし実際は無宗教ではないか、などと書いている。

宣教師ゴーブルとの船中面談の久米メモが残っているが実記にはゴーブルの名前がでてこない。

ゴーブルはペリー来航時に水夫だったが余生を日本に捧げたいという気持ちをもった。しかし米紙は前科者で無教養な人間と報道したし、日本側も侮蔑したらしくそのために実記に名前がないものと考えられる。これは実記の内容は慎重に選択されている事例といえる。なお川島第二郎のゴーブル研究がある。

③アメリカでの体験

雪に閉じこめられたソルトレークシティで久米らはモルモン教徒が米国内で追いつめられている姿をみた。モルモン教の教祖は日本でのキリシタン問題に理解を示している。この経験で久米らは「信教の自由は貫けるものか」という問題を意識している。

日本の英字紙ナガサキガゼットの伝えるキリスト教弾圧記事で使節団は米側から批判されている。岩倉たちは留守政府の弾圧に抗議できないのかと現地紙で報道されている。

ワシントンでは森有礼が開明派の外交官として活躍していた。信教自由主義の立場である。しかしこのアラビア馬的急進論も岩倉や久米のような老練な儒者によって諭されている。森は以前に横井小楠とも心を許しあっている。

儒者対急進的キリスト者という構図で両者の接点を考えることは面白い。現代における若者への語りかけにつながるテーマである。著作を読み直したが森は非常に面白い人物で再評価に値するのではないかと思う。

④ヨーロッパ体験

ヨーロッパ各国で使節団の学習は深化し宗教のもっている多面的な側面や役割を学んだ。

富国強兵のための政治的社会的器機としての有用性、文明国にふさわしいのは新教であること、キリスト教が西洋文明の精神的推進力であること、宗教は迷信ではなく人間にとって大切なものであること、などである。

また信教の自由についての認識が深まるにつれてそれへの態度が慎重になった。総じていえば、欧米と対等な立場で東西宗教を捉え直し宗教政策にも主体的に日本の立場を選択する姿勢が

第２２回例会における山崎先生の講演

深まったといえる。

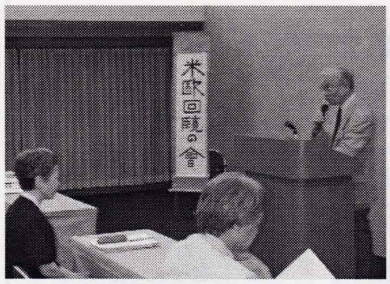
⑤高札撤去問題

明治六年にキリスト教禁制の高札が撤去された。これをもって日本においてキリスト教布教は黙許されたというのが通説であった。事実、多くの日本人も宣教師もそう理解したし外国人にはそう説明していた。しかしこれは政府方針の伝達方法の変更に過ぎず黙許ではないとする説がでている。その論は政府は漸進的な解禁を進めたので黙許は早くても明治九年から一〇年とみている。米欧回覧中の岩倉に、この件で日本から照会が行われている。これに答えて岩倉は「勝手にそう思っているだけだ」と確かにいっている。この問題は私も再検討の必要を感じている。

⑥文明開化策

文明開化は知的なレベルと民衆レベルの二層構造で進んだが久米も「文明手引草」、「西洋善悪の異を話す」などの著作によって庶民に向けた西洋紹介をしている。

これに対して「米欧回覧実記」は文明開化最盛期における国民、特に儒学者たちに向けた本格的な報告書となっている。



司会の歴史部会　半澤氏

終了後も喫茶室で山崎先生と懇談

★久米邦武と宗教

時間の制約でこのテーマは話すことができないが一言だけいう。久米は西洋の物質主義を批判した。しかし彼が貿易や交通（鉄道）について語るときに単なる文明開化や利益追求の手段ではない広く高いものを考えていたのではないか。鉄道については、たとえば宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の鉄道のイメージを私は感じる。

（歴史部会　半澤健市）

講演資料

久米邦武と宗教

山崎教授が当日用意された資料の中から、関連する箇所を抜粋し、紹介します。

【レジュメより抜粋】

①歴史と宗教

・西洋史学の四つの標準――人種、言語、宗教、法俗。この中で西洋歴史が、宗教と人種と関りを深くしている点に着眼。

・「神道は祭天の古俗」刊行。神儒仏、ゴッドを一つに調和しようとしている。

・日本人の性情は西洋人と異なって、淡白、矯正を苦としない、残酷な目にあったことが無いから別に救世主を必要としないと言う。

・儒学、国学を批判し史学の活眼を説く。

②日本のキリスト教との関り

・プロテスタントとの関り：明治二十五年の久米論文事件以降、「日本回帰」への動きの強いプロテスタント側からの積極的な招聘（講演、寄稿）を受ける。当時の久米がしばしば寄稿している諸雑誌――「六合雑誌」（プロテスタント）「宗教」（ユニテリアン）「八紘」（立教大学）「天地人」（カトリック）

・カトリックへの接近：宣教師ステイシェン口述、久米邦武筆記による聖書「耶蘇基督真跡考」刊行、明治三十年。

③宗教的原理思考と科学主義

・儒教の「天」的な「神」を原理として、世の顕象の中の弊害、不合理を解きあかし真の事実を究めることと説く。

・「古事記」や「日本書紀」の主人公を、神道では神様と見るが歴史では人間と見る。

・「理想的宗教の発見とその実現を目的とす」というユニテリアン的宗教概念に同調するところもある。

【資史料集より抜粋】

◆久米邦武「孔子の正義と人道」久米美術館

「独逸の伯林にて同郷の留学生が訪ひ来り、談は西洋の徳義（モラル）は基督教に出づ、法律の正義も根本は宗教を採用するならんとの論に及び法科生は大に之を否認し夫れは哲理の根本があるを弁じ、理科医科生は反対し否其哲理も懐疑的にて根拠まだ薄弱なり、やはり宗教によらざれば第一受判人が充当とせぬなどゝ論戦に花が咲いた。」

◆久米邦武「支那大観と細観」一九一七年・新日本社

有體にいへば、私も以前は和漢の天神を西洋のゴッドと同一として、神儒佛を一つに、調和しやうと考えた末に、彼の「神道は祭天の古俗」といふ論を発表して大に失敗した。但しここにいふ失敗の意味は決して他から受けた盛なる攻撃をいふものではなく、自己意思の失敗である。其後和漢でいふ神と天とを西洋のゴッドと同一にせんと欲した最初の意思が、到底成立すべきに非るを見極めたによって、今日に於いて全然其説を放棄して仕舞った。

要するに今は神学という一科の学を開いて西洋では攻究して居る程に、此問題はむづかしい問題であるから、容易には論断し難いけれども、日本、支那の天神と西洋のゴッドとは全然違ったものであると考え着いたのである。

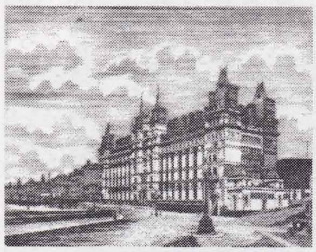
実記を読む会の現況
連絡　クラウンインターチェンジ
Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093
info@crown-interchange.com

アメリカ・イギリス編を読んで

金本君子
（7月5日・読む会）

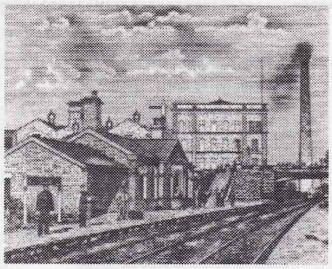
久米邦武は近代化された国家の姿を熱心に客観的に見学し彼独特の言葉で表現している。

米英両国で郵便局を見る。貿易国である為その量や仕組みに驚き「日本ノ人ハ西洋ヲ想像スル、浮槎星漢（天の川）ノ如シ、西洋ノ商人ハ世界ヲ視ルコト一都府ノ如シ」と表現。一方郵便とは「家猫ヲ産スルモ、亦相報知スルニ至ル」と記している。即ち、家を出た家族に、"たま"が子供を産んだ、可愛いよ」と知らせられるものと感じている。また、たくさんの工場を見学するが、ある所では一時間しか見せてくれない。「馬ヲ走ラシメテ燈ヲミタルガ如シ肯綮（こうけい）ヲ知ルニ足ラス」と残念がる。巡査は「バイブルヲナメテ誓ヒヲナシ」、「尼院ニ赴ク録スベキコトナシ」、スコットランドのキルト姿は「風俗ミナ撲魯ニシテ衣服奇古ナリ」などの言葉は、もと佐賀藩士、久米邦武の姿が見えて面白い。


リヴアプールの北「エストロン」汽車駅

次に産業革命について厳しい見方をしている。リバプールで「此室ノ傍ラニ一筐ヲ釣シテ貧民ノ為ニ施金ヲ集ム、英国ニハ貧民多キユエ済貧ノ法ニ心ヲ尽ス」と記し、労働条件、空気の悪さと「民住清潔ナラズ」で、上等は三十五年、中等は二十三年、下等の工人は十五年と寿命の短かさも指摘している。植民地印度について「年々ニ其民膏ヲ搾リテ自ラ肥ユ、猶檸檬ヲ搾ルカ如シ」とあり、軍隊も英国軍の三分の一を定住させると指摘している。

積極的な面では、蒸気の効力の大きさに注目し随所に蒸気を何馬力使用して働く人男女何人と記している。そして何より貿易の重大さをあげ、「輸入スルモノ二種、甲ハ食糧、乙ハ国民ノ制作元、船舶ノ出入一日絶エレバ人民飢餓スル者アリ」と記し、また輸出の重大さをあげている。リバプールでの鶴頸秤という起重機について「西洋ノ人ハ肩ニテ重キヲ運スルコトナキノミナラズ―中略―必ズ車輪ノ力ヲ借ル。故ニ・ノ荷モ往往重サ一噸ニ及フヲ常トス、以テ日本ニ運シ来レバ多人集リ扛（あ）ケ互ニ辦争シテ喧囂（けんごう）シ荷物ヲ擲（なげう）チ時間ヲ耗（ついや）シ往往ニ手足ヲ傷（やぶ）リ」と記して我が国の遅れを指摘している。


「ソルテヤ」村「アルパカ」製場の汽車駅

最後に、私の十年近い英国滞在中に感じた不思議な社会、責任ある支配階級と支配される階級の共存の社会を久米邦武も感じたのだろうか。アメリカのロッキー越えの寝台車で「欧地ハ立君国ニテ貴賤等アリ坐臥ノ儀ヲ慎ミ貴賤雑処スルヲ嫌フ」故この車はないと記し、英国編では貴賤によって食物から衣類装飾品の材料まで違うとしている。

リバプールの船学校では上級の者は設備のよい船にお金を払って乗る。他は無料で設備の悪い船に乗ると指摘。アルパカを生産する富豪サータイトルについて「英国人ハ職工ヲ保護シ貧民救護ニ力ヲ尽スヲ栄誉ノ一トナス」と書き、学校、養老院、病院、寺などがあり「邑中五千ノ人口ミナタイトル氏一家ヲ仰グ」と記している。

米欧回覧実記より、ほんの一部拾った。面白いこと拾いつくせぬ程ある本である。

関西支部の現況
連絡　山崎 岳麿
Tel&Fax 06-6853-3137
takechan@tcct.zaq.ne.jp

四日市「米欧回覧実記の会」と交流

関西支部例会報告

未だ残暑の厳しい八月二十九日（水）、大阪大学工業会会議室で定刻一時より開催。今回四日市の「米欧回覧実記の会」を代表して鈴木善弥さんがお見えになり、十三人と珍しく賑やかになった。

初めに山崎より十一月二十三日より開かれる国際シンポジュウム「岩倉使節団の再発見」について説明、参加を要請。「久米邦武文書」第三巻（岩倉使節団関係）刊行記念の久米美術館での展示目録を紹介。

「米欧回覧実記」を読むのは、第三巻のベルギー、オランダ編から選んで拡大コピーした九枚。面積・人口、我が九州くらいの両国の国力が、大国を超え、ヨーロッパどころか世界貿易で大きな力を示しているのは、国民の「勉励和協」によるものと断じている。そして、ベルギー人に「国に自主の民乏しければ、国力衰弱し、国を保存しがたし」と聞き、「国の盛衰は、政治の影響にあらずして、国民の和協せる影響を、政治に表わすのみ」と言われると、日本の現状を考え、皆で顔を見合わせた次第。次に鉄道について民営と官営の得失を論じている所を読み、今も昔も同じような議論があると感じ、日本の鉄道の歴史について皆さんから色々話が出た。

ヘーグの町が今も清潔で、首都でありながら、静かであること。アムステルダムはやはり「勤めたるというべし」の状況。そして運河の見学で、当時コンクリートが今のポルトランドセメントでなく、火山灰が使われた事について論議があった。

最後に四日市の集まりについて、鈴木さんからご説明を聞き、難しい漢語を一々字引を引いて解説しておられる林先生にも感心したが、それを受けて、小人数の会で見事な会報を出しておられる鈴木さんのご努力に感心した。

次回は本部のシンポジュウムの後、少し延びるが、十二月七日（金）とする事になった。

（山崎）

歴史部会の現況
連絡　半澤 健市
Tel&Fax　03-3717-5576
khanzawa@dh.catv.ne.jp

黒澤明のダイナミズムに酔う

第17回歴史部会報告

・日時
二〇〇一年六月三〇日(土)午後一時から五時半まで
・会場
国際文化会館D会議室
・テーマ
黒澤明論　～「わが青春に悔なし」をめぐって
・報告者
松本正志氏(映画監督・当会会員)
・内容

★歴史部会の「人物による日本近代史」シリーズは前回の山田耕筰に続いて黒澤明の登場である。京大滝川事件をモデルにした作品のビデオ上映と東宝出身の映画監督のスピーチがその内容であった。部会初の土曜日開催に二五名の参加者があった。

上映ビデオを見て、戦後民主主義そのものを映像化したような巨匠のヒューマニズムに圧倒される。一一〇分もあっという間である。休憩の後に行われた松本会員の報告は、膨大で精密な資料を駆使した内容豊富なものだった。この会の直前には黒澤の一番弟子で近著「評伝　黒澤明」が好評の堀川弘通監督に取材している。(半澤は幸運にもその機会に同席できた。)

★近代的経営を誇った東宝と戦後争議の関係、滝川事件の時代背景、黒澤を生んだ東宝撮影所の企業文化、黒澤演出の秘密、など多岐にわたる座談が続いた。現場にいた業界人だけに可能な内幕秘話もある。

質疑応答を含めて約四時間半は短く、幹事としては黒澤と滝川事件を同時に料理する企画が無謀だったと反省することしきりである。

(半澤)

２５人の参加者で盛会の第１７回歴史部会
(正面右側が報告者の松本氏)

現未来部会の現況
連絡　塚本 弘
Tel　03-3211-2765　Fax 03-3213-1371
h-tsukamoto@jeita.or.jp

小泉内閣を採点する

7月12日部会報告

「小泉内閣を採点する」ということで、小泉純一郎首相に関する著書もあり(「人間　小泉純一郎」)、小泉首相に一番近い政治評論家として知られる浅川博忠氏を招き活発な議論を行った。

浅川氏からは、身近な人からしか聞けないようなエピソード、例えば、小泉氏の信条は議員二十五周年表彰を断ったことからも判る、初志貫徹、終始一貫の男、聖域なき改革を本当にやろうとしている、森派の会長の時は、森氏を徹底的に守るというような仁義に厚い面も持っている、ポストに連綿としない、今までの自民党型の政治学とは違う、永田町の変人は一般社会の常人だ、など興味深いお話をお聞きした。

会場からのコメントとしては、改革を断固やるべしという声が強かった。

・今、権力闘争をやっている時ではない。国家をどうするかという緊急の時だ。特殊法人はなくする、官の仕事は、民にまかせるだけまかせる。そういうことが必要だ。

・余計な役所がありすぎるから、それを外すと雇用は増える。一時的に一年位は失業が増えても、後は良くなる。

・政府には期待しないで、邪魔だけしないでくれと言うべきだ。公的部分がのさばりすぎている。やらなくていいことをやっているから、やめさせないといけない。

など政治への注文が多く出た。他方、「改革をやる体力はあるのか」も大きな議論となった。

・リチャード・クーは、日本の経済の落ち込みの酷さはアメリカの場合とスケールが違う、失業者が大量に出てしまう、不良債権は十年ぐらいかけて処理すべきだと言っている。小泉首相は一体どの位のスピードでやるのか。

・デフレをストップする政治が欲しい。雇用の確保が必要。経済の国際化もよいが、日本に新たな雇用を創出しなければならない。アイディアコンテストでもやったらどうか。

・構造改革は経済の問題だ。何を改革したらよいのか、それが見えない。物理的に何をするのか。こんな時に緊縮財政など、良いはずがない。不良債権を三年で解消するなど、素人論もはなはだしい。出来ない話はやめて、このタイムスパンでこれをやる、よってこれだけ我々は我慢をする、ということでなければ、やがて小泉さんに失望することになってしまう。

他にも議論百出した。最後に、今、小泉内閣の採点といっても、まだ点はつけられない。今秋にもう一度議論しようということで散会した。興味ある方の御参加を是非お願いしたい。

(塚本)

インターネット部会の現況
連絡　中山 進
Tel　03-5449-1397　Fax 03-3705-8567
s-nkym@kt.rim.or.jp

ホームページに英文登場

活動への参加歓迎

ホームページの更新は順調に行うことができるようになり、八月には僅かながら初めての英文のページ(英国セミナー案内)を試みた。国際シンポジウムの英語版パンフレットもでき次第掲載の予定である。

今後はホームページを媒介した会員間コミュニケーションを活発化するテーマや企画を話し合う予定である。連絡は殆どメールであり、会合などの時間がとりにくい人でも編集や企画への参加など充分可能である。(中山)

「米欧回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会　員　上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回くらい全体例会をもちます。

分科会　テーマ別にグループ活動をします。映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなど。

機関紙　年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹　事　会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・分科会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局　当面「イズミ・オフィス」に置きます。

〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729　米欧回覧の会

「米欧回覧ニュース」のバックナンバーはホームページに掲載されています。また、インターネットサロン(会議室)にも気軽に参加してください。

http://www.iwakura-mission.gr.jp

国際シンポジウム・行事プログラム

2001年11月22日（木）～25日（日）

11月22日(木)

15:30～17:30
映像「岩倉使節団の米欧回覧」特別上映会
(日本プレスセンター9階大会議室)

18:30～20:30
岩倉使節団派遣130周年記念祝賀並びに歓迎レセプション
(日本プレスセンター10階ホール)

11月23日(金)祝日

10:00～21:00
セミナーの部 【第1日】
知られざる事実・・ミクロ的アプローチ
(学術総合センター会議室)

11月24日(土)

10:00～17:00
セミナーの部 【第2日】
東西文明の遭遇・・東アジアからの挑戦・・マクロ的アプローチ
(学術総合センター会議室)

11月24日(土)

10:00～17:00
映像「岩倉使節団の世界一周旅行」上映会
(学術総合センター講堂)

11月24日(土)

18:30～20:30
懇親会(セミナー参加者)
(KKRホテル東京)

11月25日(日)

10:00～17:00
パネル・ディスカッションの部
岩倉使節団の今日的意義・・21世紀的アプローチ
(学術総合センター講堂)

11月23～25日

会期中常時
展示・交流サロン
(学術総合センター中会議室)

編集後記

◇九月十一日、百十階建のニューヨク貿易センタービルがわずか一時間ほどで倒壊する衝撃的なテレビの映像に見入っていました。西欧文明が築き上げてきたものの大きさ、それらとの融合を永遠に拒否するように見える激しい憎悪、そして次第に明らかになる損失の甚大さに言葉を失います。

当会には、様々な影響を受けているであろうアメリカ在住の会員、関係者が多くいます。とても他人事とはいえません。

◇国際シンポジウムの発表テーマがほぼ出揃い、ようやく全体像が明確になってきました。プログラムの一つ一つが多様な議論によって練り上げられてきた結果であることを感じます。

とりわけ興味を惹くのは第三日の「今、何を学ぶべきか、その今日的意義を問う」という公開のパネル・ディスカッションの部です。近代百三十年における東西文明の遭遇、衝突の歴史はイスラムを含めた異文明の共存、融合への道という現在進行形の難題に行き着きます。大いに熱い議論がかわされることが期待されます。(N)